

〒745-0034 周南市御幸通2丁目22
 防長本社 Eメール bocho@chugoku-np.co.jp
 中国新聞山口 Eメール chugoku@c-spice.co.jp
 情報サービス URL http://www.c-spice.co.jp
 ☎0834(33)5605 FAX0834(33)5610

ホット通信

津波によってスリランカの人々は家族や愛する人々を失った。その痛手は大きかったが同時に、悲しみの淵からも希望を失わず、明るさを取り戻していった。

日本からのODAで寄付されていたが、今まで一度もスリッチを入れることがなかった地震測定機のチェックが行われた。人々の心のよどこ

以んたの やまぐち日記

②

ろとしての宗教心が高まり、お寺などへの参拝が多くなった。犠牲者への追悼の意と自然の猛威の傷跡を次世代に引き継ぐと、二千人近くの死者を出した列車を博物館として保存し、観光客でにぎわっていた。

サンゴ礁が破壊されていたが、被害が小さかった海岸では、被害が小さ

被災地に温もり伝える

スリランカからの言づて

Ⓣ



多数の死者を出した列車被災現場でも、学生たちは現地の子どもたちに囲まれた

かったことから、地元のサーフア団体を中心になって保護を呼びかけていた。

自然はそんなにひどくない。津波は数回にわたって襲来したが、一回目は軽いもので、誰も犠牲になっていない。それから少し時間をあけて二回目には大きな津波が来た。一回目は神様からの「早く逃げなさい」という警告だったのだ。

危険を感じた時にすぐ逃げたり、家の中へ貴重品を隠したり、動物たちの行動にも学ぶべきことがある。象が飼い主を背中に無理やり乗せ、山側に向かって助かった話も有名である。

人間は本能的に過去を受け入れ前向きに生きていくようにできているのかもしれない。

昨年九月、県立大学の学生七人を連れて再び被災地を訪れた。支援のお金がないならし、津波襲と徹夜で議論した末、スリランカの人々が暑さを少しでもしのげるようにと日本全国から団扇をかき集めた。

学生たちは、親や家を失った子供たちと、朝起きてから泣いてなど日が続いて一緒に過ごした。家族のた。言葉が通じないのに、地べたに座り込んで現地の人々と懸命に交流する姿に僕は目頭が熱くなった。

擦を洗い流したかのように、復旧へ手を取り合っていた。衣類や食料は国内の無数の組織から集められ、海外からの援助に頼る必要もなかった。地元の町長さんが「も

いのはみんな一緒。前向きでた。日本政府が何十億円の支援金を積んでもなかなか届けられない、日本からの温もりが学生たちによって被災地の人々の心に伝わったことだ。

人間同士
 の争いや摩
 J・A・T・D.にしゃんた)

ひとつ確信したことがある。日本が何十億円の支援金を積んでもなかなか届けられない、日本からの温もりが学生たちによって被災地の人々の心に伝わったことだ。

人間同士
 の争いや摩
 J・A・T・D.にしゃんた)

教育・文化